

長崎大学工学部 正 員 岡林 隆敬

長崎大学工学部 学生員 武林 和寿

1. はじめに 地震、風荷重等の不規則な外力を受ける構造物の応答解析においては、構造物は解析可能な力学モデルに単純化されると同時に、外力も確率過程によりモデル化される。このような不規則外力を受ける構造物の解析は、不規則振動論としてすでに定着しているものと思われる。一方、実在の構造物から解析モデルを構成する際、解析モデルには多くの不確定要因が含まれるが、この不確定要因が応答解析の結果に及ぼす影響は少なくない。構造物の解析モデルに内在する不確定要因としては、質量、剛性、粘性、強度および減衰などのばりつきがある。このような確率変数を有する系の応答解析には、きわめて一般的な解法があるとはいえない。本論文では、線形近似理論を適用した解法を提案する。不規則外力を受ける構造物系の応答において、系のパラメータが確率変数になると、二乗平均値はこのパラメータに対する確率変数となる。ここでは、二乗平均応答の系のパラメータに対する平均値について検討した。

2. 力学モデルの表現 非定常不規則外力を受ける構造物系の運動方程式は、状態空間でベクトル表示すると、(1)式で記述される。非定常外力を(2)式のように、確定関数と確率過程の積で表わされるものと考え、確率過程は、(2)式のフィルタ方程式の出力として与えられるものとする。このとき、構造物-フィルタ系は、(3)式の確率微分方程式で表現できる。一般性を失うことなく、(4)式の解過程の平均値応答は(5)式にあるものとする。こうとき、外力  $W(t)$  に対する解過程  $X(t)$  の共分散行列  $R_X(t)$  を  $R_X(t) = E[X(t)X(t)^T]$  と定義すると、この時間的変化は、(4)式の共分散方程式に支配される。ここに、 $E[\cdot]$  は確率過程に対する演算子である。

次に、確率微分方程式の係数が確率変数である場合、その確率変数の集合を  $\Lambda$  と表し、 $\Lambda = \{\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n\}$  と定義する。 $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  の実現値の集合を、 $\Lambda = \{\lambda_1, \dots, \lambda_n\}$  により定義する。さらに、 $\Lambda$  の確率密度関数を  $P(\Lambda)$  と定義する。 $\Lambda$  に関する平均の演算子  $\langle \cdot \rangle$  の記号で表す。

本研究で求める量は、応答の分散、共分散の確率変数  $\Lambda$  に関する平均値であるから、これは次式で与えられる。

$$\langle R_X(t) \rangle = \int R_X(t, \Lambda) P(\Lambda) d\Lambda \quad (6) \quad \text{このような確率変数 } \Lambda \text{ を含む確率微分方程式に対応する共分散方程式は次式で記述する。} \quad \dot{X}(t, \Lambda) = A(t, \Lambda)X(t, \Lambda) + B(t, \Lambda)W(t) \quad (7)$$

$$\dot{R}(t, \Lambda) = A(t, \Lambda)R_X(t, \Lambda) + R_X(t, \Lambda)A(t, \Lambda)^T + B(t, \Lambda)\Omega B(t, \Lambda)^T \quad (8) \quad \text{ここで、共分散} R_X(t, \Lambda) \text{ は確率変数となり、共分散方程式は確率微分方程式となる。}$$

3. 線形近似理論による定式化 不確定変量を表す確率変数  $\Lambda$  は、平均値  $\bar{\Lambda}$  と平均値周りの変動  $\hat{\Lambda}$  を用いて、 $\Lambda = \bar{\Lambda} + \hat{\Lambda}$  のように表される。共分散応答  $R_X(t, \Lambda)$  を  $\bar{\Lambda}$  のまわりで Taylor 展開すると、次のように表される。

構造物系

$$\dot{Y}(t) = C(t)Y(t) + F(t), \quad Y(t_0) = Y_0 \quad (1)$$

 $Y(t), F(t)$ :  $n_1$  次元ベクトル

非定常不規則外力

$$F(t) = D(t) \cdot Z(t) \quad (2)$$

 $D(t)$ : 確定時間関数,  $(n_2 \times n_1)$  行列 $Z(t)$ : 確率過程,  $n_2$  次元ベクトル

フィルタ系

$$\dot{Z}(t) = E(t)Z(t) + W_Z(t) \quad (3)$$

 $W_Z(t)$ :  $n_2$  次元白色雑音過程ベクトル

構造物-フィルタ系

$$\dot{X}(t) = A(t)X(t) + B(t)W(t), \quad X(t_0) = X_0 \quad (4)$$

 $X(t)$ :  $(n_1 + n_2)$  次元ベクトル $W(t)$ :  $n_2$  次元白色雑音過程ベクトル

共分散方程式

$$\left. \begin{aligned} \dot{R}_X(t) &= A(t)R_X(t) + R_X(t)A(t)^T + B(t)\Omega B(t)^T \\ R_X(t_0) &= R_0 \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

$$R_{ij}(t, A) = R_0(t, A) + \sum_{i=1}^n \hat{\lambda}_i R_i(t, A) + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \hat{\lambda}_i \hat{\lambda}_j R_{ij}(t, A) \quad \text{--- (9)} \quad \text{ここに、} R_i(t, A), \text{ および、}$$

$R_{ij}(t, A)$  は、 $\hat{\lambda}_i$  および  $\hat{\lambda}_j$  に関する偏微分を表している。(9)式の両辺に  $A$  に関する平均操作を施すと、 $R_{ij}(t, A)$  の  $A$  に関する平均値

$$\langle R_{ij}(t, A) \rangle = R_0(t, A) + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \langle \hat{\lambda}_i \hat{\lambda}_j \rangle R_{ij}(t, A) \quad \text{----- (10)}$$

を得る。(9)式において、 $A(t, A)$  と  $B(t, A)$  を  $A$  の平均値回りで展開する。

$$A(t, A) = A_0(t, A) + \sum_{i=1}^n \hat{\lambda}_i A_i(t, A) + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \hat{\lambda}_i \hat{\lambda}_j A_{ij}(t, A) \quad \text{----- (11)}$$

$$B(t, A) = B_0(t, A) + \sum_{i=1}^n \hat{\lambda}_i B_i(t, A) + \frac{1}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \hat{\lambda}_i \hat{\lambda}_j B_{ij}(t, A) \quad \text{----- (12)}$$

(10)(11)式を(9)式に代入し、両辺が恒等的に0となるものとする。次の一群の連立微分方程式を得る。

$$\dot{R}_0(t) = A_0(t) R_0(t) + R_0(t) A_0(t)^T + B_0(t) Q B_0(t)^T \quad \text{--- (13)}$$

$$\begin{aligned} \dot{R}_i(t) = & A_0(t) R_i(t) + R_i(t) A_0(t)^T \\ & + A_i(t) R_0(t) + R_0(t) A_i(t)^T + B_i(t) Q B_i(t)^T \quad \text{--- (14)} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \dot{R}_{ij}(t) = & A_0(t) R_{ij}(t) + R_{ij}(t) A_0(t)^T + 2 A_i(t) R_j(t) + 2 R_i(t) A_j(t)^T \\ & + A_{ij}(t) R_0(t) + R_0(t) A_{ij}(t)^T + B_i(t) Q B_j(t)^T \quad \text{--- (15)} \end{aligned}$$

これはマトリックス形式の微分方程式であるから、通常のベクトル形式の微分方程式に変換する。不確定変量を2変量として、 $\hat{\lambda}_1$  と  $\hat{\lambda}_2$  とすると、微分方程式は、次のようになる。

$$\frac{d}{dt} \begin{bmatrix} H_{00}(t) \\ H_{11}(t) \\ H_{12}(t) \\ H_{11}(t) \\ H_{12}(t) \\ H_{22}(t) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} G_0(t) & & & & \\ G_1(t) & G_0(t) & & & \\ G_2(t) & 0 & G_0(t) & & \\ G_{11}(t) & 2G_1(t) & 0 & G_0(t) & \\ G_{12}(t) & G_2(t) & G_1(t) & 0 & G_0(t) \\ G_{22}(t) & 0 & 2G_2(t) & 0 & 0 & G_0(t) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} H_{00}(t) \\ H_{11}(t) \\ H_{12}(t) \\ H_{11}(t) \\ H_{12}(t) \\ H_{22}(t) \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} F_0(t) \\ F_1(t) \\ F_2(t) \\ F_{11}(t) \\ F_{12}(t) \\ F_{22}(t) \end{bmatrix} \quad \text{----- (16)}$$

4. 数値計算と考察 数値計算は、白色雑音と狭帯域過程を入力とする1自由度系の変位のr.m.s.応答を対象とした。1自由度系の諸元は、次の通りである。質量の平均値  $\mu_m$  1 (kg・sec<sup>2</sup>/cm)、ばね定数の平均値  $\mu_k$  4π<sup>2</sup> (kg/cm)、減衰係数  $C$  0.4π, 0.04π (sec/cm)、減衰定数の平均値  $\bar{\gamma}$  0.2, 0.02, 固有円振動数の平均値  $\bar{\omega}_0$  2π (rad/sec)。図-1は、白色雑音を入力とする1自由度系のr.m.s.変位応答が、質量とばね定数の変動により変化する様子を示したものである。図中には、本解法とシミュレーションを並記したが、変動係数0.3程度まで良好一致を示している。図-2, 3は、パワースペクトル密度

$$S_z(\omega) = S_0 / \{ (\omega_0^2 - \omega^2)^2 + 4 \bar{\gamma}^2 \omega^2 \omega_0^2 \} \quad \text{----- (17)}$$

を有する狭帯域過程による応答を示したものである。1自由度系の減衰定数および(17)式の $\bar{\gamma}$ を0.02とした。1自由度系の固有振動数 $\omega_0$ と狭帯域過程の中心周振動数 $\omega_c$ との関係は、図-2は、 $\omega_0 = \omega_c$ の場合、図-3は $\omega_0 = 0.8 \omega_c$ の場合の計算結果も示している。狭帯域過程による応答は、本解法は、変動係数が0.05程度までシミュレーションと良好一致を示している。

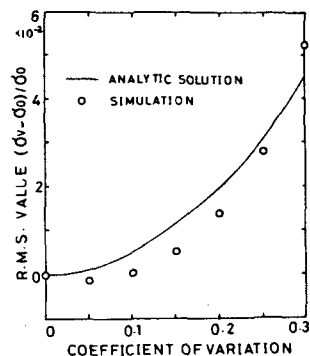


図-1 白色雑音過程入力による定常r.m.s.応答

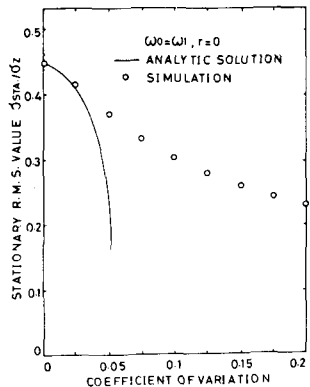


図-2 狭帯域過程入力による定常r.m.s.応答

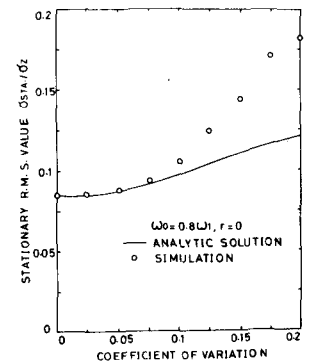


図-3 狭帯域過程入力による定常r.m.s.応答